



「第八回オリンピック馬術競技視察報告」

かつてオリンピックの各種競技の中で馬術競技は花形であり、全オリンピックの最後を飾るほどの競技でした。

陸軍では、この馬術競技参加をめざし、大正 13（1924）年の第 8 回パリ大会に視察団を派遣、報告書を作成しました。上掲の史料は、視察団の陸軍騎兵大佐蒲田穆及び同少佐遊佐幸平による報告書で、中央及び左掲の史料には馬術競技中、最も重視されたという「障碍飛越競技」の実施要領と経路図及び障害図が描かれております。この報告書には、競技内容、参加国、派遣の要領、選手の選定などが含まれています。報告書の最後には、馬術競技は、国家国軍にとり極めて有意義であり、将来「オリンピック」馬術競技に選手派遣の要ありと記述され、中でも、馬術競技の出場者のほとんどが陸軍将校であるので、同様に日本からも陸軍将校を参加させるよう強調しています（登録番号：中央・軍隊教育その他-175）。第 8 回大会に日本からの馬術競技参加者は派遣されていませんでした。

こうしたことから昭和 3（1928）年の第 9 回アムステルダム大会から日本の陸軍将校が馬術競技に参加することになりました。昭和 7（1932）年の第 10 回ロサンゼルス大会においては陸軍騎兵大尉西竹一が、愛馬ウラヌスとともに馬術障害飛越競技に参加し、金メダルを獲得しました。西が競技を終えると 10 万を超える観衆は総立ちになったといえます。今日でも西の金メダル受賞は馬術競技で日本史上唯一です。